第 13 回発行

ぶらんこ

令和２年８月７日(金)
おおむたこども園
金丸恵美子

アート思考とは…

岡山県の大原美術館で、モネの名画『水蓮』を見て、４ 歳の男の子が「カエルがいる！」と言ったそうです。「どこに？」学芸員の問いに、「今、水にもぐっている」と答えたそうです。このエピソードは、「13 歳からのアート思考」と言う、本の中に紹介されています。著者は、無名の美術教師、この分野としては異例の９万部を売り上げるベストセラーです。

この絵画の中にかえるは描がかれていません。筆者はこれこそが、『アート鑑賞だ』と言っています。大人は、鑑賞よりも「いつ描かれたのか？」、「モデルはどこか？」などの作品の情報や知識に焦点を置きがちで、作品の純粋な鑑賞は、二の次になっていると言うのです。

「全ての子どもはアーティストである。問題なのは、どうすれば大人になった時にもアーティストのままでいられるかだ」これは、ピカソの名言。人は誰もが、この男の子ように『自分だけのかえる』を見いだせるアーティスト性を持っていたはずです。しかし、知識や正解ばかりを要求されるうちに、この感性が薄らいでいくのです。(センス・オブ・ワンダーと同じですね)

雲を見て「カニがとんでいる」と言った女の子がいました。「えっ！？」私だけ見えませんでした。それは、横から見えるカニだったからです。真冬にヤマモモの木を指して「クワガタがいる」と大興奮で言った男の子もいました。それも私は、見つけられませんでした。ヤマモモの幹いっぱいのクワガタだったからです。確かに大人は、固定観念が有り過ぎて、一方向でしか見えなくなっています。

自分なりの視点で自分だけの答えを見出す思考が『アート思考』と筆者は書いています。この思考がとんでもないアイディアをうみ出すなど、人生や学問、ビジネスの世界で結果を出したり、幸せをつかむことにつながっていると言うのです。

私達大人は、子ども達の生まれ持った『アート思考』が生涯保てるように、ひとりひとりの個性的な見方や考えを柔軟に受け入れ共感し、むやみに知識や正解を求めないことが大切ではないでしょうか。おおむたこども園では、子ども達の中にある「アート思考」や「センス・オブ・ワンダー」を大切に育んでいきたいと思います。

＊「13 歳からのアート思考」末永幸保著　この本の紹介をオリエンタルラジオの中田敦彦氏の YouTube 大学で配信中

もうすぐお盆です…

園の庭に、トンボがとんでくるようになりました。「トンボの背中には、亡くなった人が乗っているから大切にしてね」と年配の保育教諭が、子ども達に知らせていました。そうです！私達の世代は、『お盆前にとんでいるトンボは、ご先祖様を乗せている』だから捕まえたり、殺したらいけないと教わりました。明らかな迷信でしょうが、むやみに殺生をしないことや先祖を丁寧に供養しなしといけない戒めも含まれているようです。

「亡くなった人がトンボの背中にのっている」これは、正にセンス・オブワンダーです。科学的にはあり得ないことですが、先人からの言い伝えが薄らいでいる現代。あえて、親から子へ伝えていくことの大切さを感じます。仏教では８月 13 日はお盆の入り。亡くなった方々がこちらへお帰りになり、１５日の晩に、また戻られると言われています。あの世とこの世を繋ぐお盆の３日間は、しっとりと少し物悲しいイメージが有ります。お亡くなりになった方に思いを馳せ、人の生や死と向き合える、お盆の言い伝えや家庭の行事が、子ども達の心にいつまでも残って欲しいと思います。お墓まいりや仏壇などに手を合わせることなどを是非、経験させて下さい。

うらへつづく…